

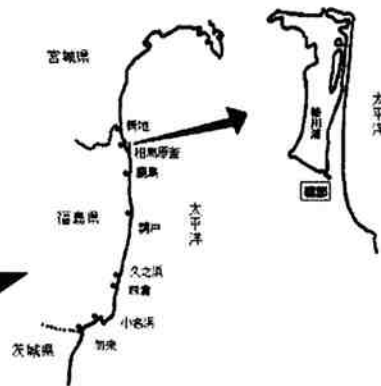
ホッキ資源回復に向けて

— 寄せホッキからの復活 —

相馬双葉漁業協同組合磯部支所青壮年部

岩 崎 久 男

1. 地域の概要



私たちが住んでいる相馬市磯部地区は、福島県の北部、「日本百景」の県立松川浦自然公園の最奥部に位置している。また、「日本の渚百選」に選ばれた大浜海岸が隣接し自然豊かな地域である。古くから半農半漁で栄え、ホッキ漁のほか、稲作、梨などの果樹栽培も盛んな地域である。

2. 漁業の概要

相馬双葉漁業協同組合磯部支所は正組合員数が 89 名、所属漁船数は 72 隻でホッキ貝桁網漁業のほか、たこ籠漁、船曳網漁業等の従事者が多い。平成 17 年の総取扱高は約 4 億 3,000 万円、そのうち属地水揚げ数量は約 700 t、金額は約 2 億 5,000 万円であった。この内ホッキ貝が主体の貝桁網漁業の水揚げは 123 t、約 5,800 万円で属地水揚げ金額の 4 分の 1 近くを占め、当支所の基幹漁業となっている。磯部地先の大浜は古くからホッキ貝の良い漁場となっているが、時折ホッキが波打ち際に打ち上げられてしまう「寄せホッキ」が春先に発生し、漁業資源に大きな被害を与えている。

このような不安定な資源対策として、支所内では昭和 48 年にホッキ貝操業船主会を組織し、曳網回数や出漁時刻の設定、休漁区の設定など管理操業を行っている。また、安全な漁とするためにグループ操業制を取り入れ、所得の安定化を目指した水揚げ金額のプール制を導入するなど福島県のホッキ資源管理のモデル的存在となっている。

3. 研究グループの組織と運営

当支所の青壮年部は、部長、副部長、会計など役員を含め 20 名で構成され、このうち半数以上がホッキ貝操業船主会にも所属している。このため部員等は漁期前のホッキガイ資源調査や保護水面調査に従事するほか、ホッキガイ付加価値向上のた

め産直やネット販売、PR活動、ゆうパック販売事業などにも取り組んでいる。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

磯部支所の近年のホッキガイ漁は、不況や「ベロ食い」問題による仲買業者の買い控えなどから単価が低迷し、漁獲金額が伸び悩んだ時期もあったが、選別強化や消費拡大のPR活動により価格は向上していた。また、平成6年に稚貝が大量発生し、この資源が漁獲加入した平成11年以降の水揚げは年間数量が400トン以上となり、金額も1億円を上回り安定して推移してきた。しかし、平成15年3月に大量の「寄せホッキ」が発生し、ホッキ資源は壊滅的となった(図1)。このような中、ホッキガイ操業船主会、青壮年部、支所が団結して資源管理に努め、選別の徹底など少ない資源を高度に利用するようにした。また、価格向上に向けた活動も継続し価格の底支えにも努めた。こうした中、平成15年と17年に新たに稚貝が発生し、資源は回復基調となり始めた。

「寄せホッキ」以降の徹底した資源管理と需要拡大のPRなど販売活動の継続で漁獲数量、金額とも向上し、浜は再びホッキ漁の活気を取り戻し始めている。

5. 研究・実践活動の状況及び成果

平成15年3月の「寄せホッキ」発生後、残存資源量を把握するため水産試験場相馬支場の協力のもと資源調査を行った。その結果、共同第22、23号区合わせた資源量(殻長75mm以上)は、1,375トンで前年5月(3,267トン)の半分以下であることが分かった(図2)。また、漁場の灘側にホッキ貝が高密度で寄っていることが判明した。ホッキ貝操業船主会、青壮年部は直ちにこれらの貝を元の漁場へ移植し、残存貝の保護に努めた。また、噴流式マンガを購入し効率的な移植や相乗り操業による経済的な操業を試みた。漁期中はこれまで以上に丁寧にマンガを曳き貝の損傷を軽減し、船上、陸上での選別を徹底してクレームを減らして少ない資源を高度に利用するようにした。漁期前の5月に資源調査を毎年実施し、資源量を把握するとともに、どんなに獲れなくても「殻長8cm未満は獲らない」という自主規制を守り、大型貝からの漁獲や安値時の休船なども実施して資源の有効利用に努めた。また、平成15年の秋に比較的多く稚貝の発生が確認され、水産試験場の研究員から分布状況や今後の成長等のアドバイスを受け、分布域での操業自粛など漁場管理を行った。

平成17年1月下旬には再び「寄せホッキ」が発生。平成15年級群に被害が及んだが、支所は直ちに県へ特別採捕の許可を申請、ホッキ貝操業船主会と青壮年部は連携して「寄せホッキ」移植に取り組んだ。この時青壮年部は、噴流式マンガにより灘側に移動したホッキ貝を集中的に回収、移植した。移植作業は6日間行い、噴流式マンガ2隻、通常マンガ10隻、延べ70隻で漁場外に移動したホッキ貝約60トン(約60000個)を漁場内に再放流した。その後この貝は順調に生育した。支所、ホッキ貝操業船主会、青壮年部が連携し迅速に対応したため、被害を最小限に食い止めることができたと思われる。

このような状況の中、青壮年部は少ない資源を持ち寄って、地元を中心に消費拡大を目指した産直活動を継続した。相馬市の「七夕祭り」では、ホッキの串焼きを

販売し、「相馬野馬追い祭り」のイベント会場では、串焼きに加えホッキご飯の試食、ホッキのむき方教室なども行って、消費者にホッキの食べ方を理解してもらう取り組みを行った。また、ゆうパック販売活動も行い、『磯部のホッキ』を全国へPRし続けた。さらに、中核的漁業者協業体支援事業の助成により平成17年に薫製機を購入、ホッキ貝の付加価値を高める取り組みとして、薫製品の開発にも着手し現在商品化の検討中である。

こうした資源管理活動により、磯部のホッキ資源は回復に向かい平成17年からは15年発生貝が漁獲加入し始め、今年度は再放流した貝も獲られ始め漁獲の主群となっている(図3)。

また、大型貝を優先した漁獲や選別の徹底、さらに消費拡大の活動も継続して行ったため、市場での平均単価は「寄せホッキ」以降300円後半～400円台で維持できた(図4)。今年度も若齢貝ながら、11月末現在で364円/kgとなっており、「寄せホッキ」以前よりも高い価格となっている。なお、今年度は燃油高騰の対策として通常マンガによる漁でも相乗り操業を実施しており、操業コストの削減も行っている。

このように厳しい状況の中でも資源管理、消費拡大、付加価値向上の取り組みを継続したため、「寄せホッキ」以降最も資源状態が厳しかった昨年は、年間水揚げ金額が5,600万円に留まったが、今年度は11月現在で7,300万円を超えており、昨年を大きく上回っている(図5)。また、平成15年に続き平成17年にも稚貝が発生し、今年秋の調査で、順調な成長が確認され後続資源も育ってきている。

磯部ホッキ漁のかつての活気を取り戻すためにも、今後もこれらの取り組みを継続し、資源を有効に利用していきたいと思う。

6. 波及効果

「寄せホッキ」で資源状態が厳しい中、漁獲サイズを下げず選別の徹底や大型貝優先の漁獲で付加価値を高め単価を維持し、資源を枯渇させずに次の発生群に繋げることができた。また少ない資源の中で産直活動など消費拡大に取り組み、新たな商品開発の可能性も生まれた。ホッキ貝操業船主会、青壮年部、支所が一丸となってこの事態に臨んだことで、ホッキ資源の管理法、有効な利用法などを改めて学ぶことができた。

7. 問題点と今後の対策

現在漁獲している平成15年級群は、平成6年の大量発生には及ばず、後続の17年級群も15年級群より少なく、危機的状況は脱したものの安泰な状況ではない。ホッキ漁を継続するために、今後も選別徹底や大型貝優先の漁獲、安値時の休漁など単価の維持に努め、資源を高度に利用していく必要がある。

また、噴流式マンガ(図6)を有効に利用し、操業コストの削減や薫製品など高付加価値となる商品の開発も行い、漁家経営向上に努め、磯部のホッキ漁のさらなる活性化に繋げていきたい。



図1 平成15年3月寄せホッキ発生

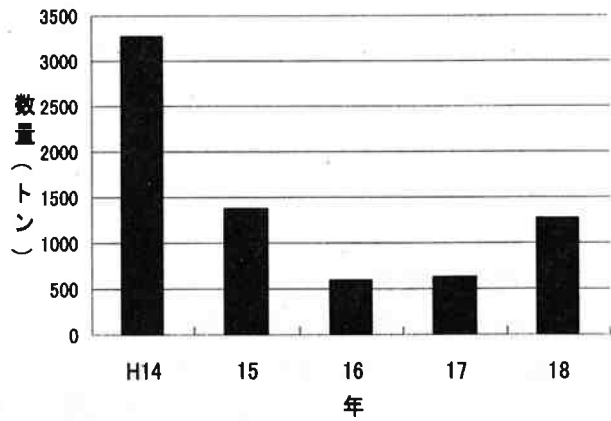


図2 共第22、23号漁獲対象ホッキ貝推定資源量

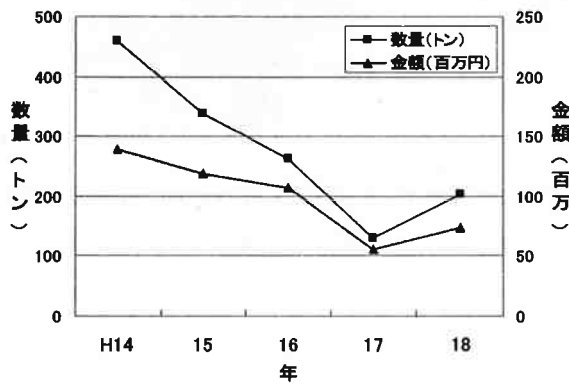


図3 磯部支所ホッキ貝水揚げ推移

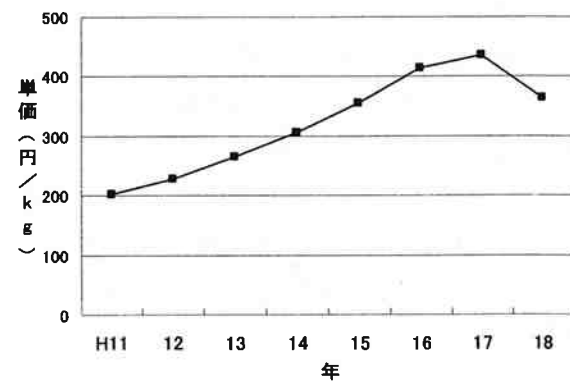


図4 ホッキ貝年平均単価の推移

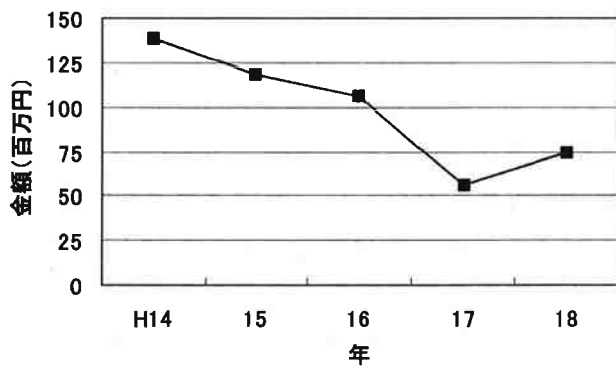


図5 年間漁獲金額の推移



図6 噴流式マンガによる操業